



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	形容詞補部の感嘆節に先行する前置詞の随意的生起(fulltext)
Author(s)	阿戸, 昌彦
Citation	東京学芸大学紀要. 人文社会科学系. I, 69: 103-112
Issue Date	2018-01-31
URL	http://hdl.handle.net/2309/148734
Publisher	東京学芸大学学術情報委員会
Rights	

形容詞補部の感嘆節に先行する前置詞の随意的生起

阿 戸 昌 彦*

英語学・英米文学・文化研究分野

(2017年8月30日受理)

要 旨

驚きを表す感情の形容詞 (surprised/amazed) の補部としてwh感嘆節が生じることがある。それに先行する前置詞の生起は随意的である。現代英語だけを見ていると、もともとあった前置詞が省略されることがあるという分析が正しいように思われる。しかし、歴史的コーパスCOHAを用いて、歴史的な変化をたどってみると、はじめは前置詞をとらない形式があり、次第に前置詞を伴う形が増加してきたということが明らかになる。また、最初に前置詞atが生起した後、しばらく遅れてからbyも生起し始め、ともに増加し、現代英語では前置詞をとることのほうが多くなっていることを明らかにした。

本小論では、歴史的な視点を取り入れ、どういう場合にwh感嘆節の前に前置詞が必要とされたのかという問題への説明を試みた。Wh感嘆節が驚きを表す形容詞の補部に生じることができるようになった時に、前置詞atを用いることで意味を明確に示そうとする力が働いたと仮定した。さらに、形容詞に結びつく前置詞としてbyが増加するのに合わせてwh感嘆節の場合にもbyの使用が広がりを見せているとした。

キーワード：前置詞の随意性、感嘆節、コーパス、歴史的な変化、驚きを表す形容詞

1. はじめに

現代英語には(1)にあげるような驚きの感情を表す一群の形容詞がある。

(1) surprised, amazed, astonished, astounded, shocked, stunned, startled, staggered, flabbergasted など

これらの形容詞の補部に名詞句が生じるときには前置詞が義務的である。一方、that節やto不定詞節が生じるときには前置詞が生じることが許されない。

- (2) a. I was surprised at her strength.
b. I was surprised (*at) that she was so strong.

(Swan (2005: 436))

- (3) a. I was surprised *(at) John('s) retching.
b. I was surprised (*at) that you had hives.
c. I was surprised (*at) to find myself underwater.

* 東京学芸大学 外国語・外国文化研究講座 英語学・英米文学・文化研究分野 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

(Ross (1973, 2004:354))

これらの形容詞の補部にwh感嘆節も生じうることはよく知られた事実である。興味深い事実は、それに先行する前置詞の生起が随意的であることである。

- (4) a. We're always amazed how often people do take us seriously. (Collins (2004: 9))
 b. They were surprised what a good price we were offering. (Huddleston and Pullum (2002: 992))
- (5) a. I was surprised (at) how little I had known about her. (八木 (1999: 231))
 b. I was surprised (at) how far I could throw the ball. (Ross (1973, 2004: 354))

しかし、wh感嘆節に先行する前置詞がどのような場合に生起するのか、あるいは、明示されなくてもよいのかという説明はまだなされていない。

動詞、名詞、形容詞の補部位置にwh節が生起する場合に、それに先行する前置詞の生起が随意的であることについては2つの立場がある。一つは、Rosenbaum (1967) 以来、安井他 (1976)、Quirk, et al (1985)、Huddleston and Pullum (2002)、Swan (2005) など多くの文法書で述べられているように、前置詞が省略されることがあるという立場である。これは、述語の補部位置にwh節が生起する場合、もともとは前置詞があるということを前提とした説明といえる。これに対して、Jespersen (1928) や Rohdenburg (2002, 2003) は、歴史的な変化の視点から、もともとは前置詞がwh節に先行して生起していたのではなく、次第に生起するようになってきたという立場をとっている。歴史的なコーパスから得られるデータから考えると、動詞、名詞、形容詞の補部に生ずるwh疑問節に先行する前置詞の随意性については、後者の説明の方が正しいと思われる(阿戸 (2015, 2017) 参照)。

これまでの研究は、現代英語だけを対象としたものであれ、歴史的な視点を取り入れたものであれ、wh節が疑問節である場合を考察するものがほとんどで、感嘆節である場合について言及するものはまれであった。筆者の知る限り、八木 (1999) のみが感嘆節と疑問節とを別々に取り上げている。彼は現代英語において、疑問節であれ、感嘆節であれ、先行する前置詞が省略されることがあるのは意味の整合性を満たす場合であることを議論している。そこでは、歴史的な視点は考慮されておらず、wh感嘆節に先行する前置詞は省略されるようになってきたと考えるのが妥当であるのか、それとも、wh疑問節と同様に、前置詞は生起するようになってきたと考えるのが妥当であるのかは明らかになっていない。本小論では、wh節として感嘆節を取り上げて、それに先行する前置詞の随意的な生起について歴史的な視点から調査と分析を試みる。

2. 驚きを表す形容詞 (+前置詞) + wh感嘆節

2. 1 現代英語における前置詞の随意性

驚きを表す形容詞の補部として生起するwh感嘆節に先行する前置詞の出現について歴史的な変化を調査するにあたって、現代英語においてどのような形容詞、wh感嘆節、前置詞が典型的に用いられているのかを見つけることから始める。

Wh感嘆節を補部にとる形容詞として「(主語の) 驚き」を意味する意味グループ(上述の(1))を挙げることができる(Huddleston and Pullum (2002: 993), Trotta (2000: 119) 参照)。この意味グループに入る形容詞が実際にはどの程度wh節・wh句と隣接して生じているのかをCOCAとBNCという現代英語のコーパスで検索した。¹ 検索文字列は“[=surprised] what/how”とした。^{2, 3}

アメリカ英語(COCA)とイギリス英語(BNC)のどちらかにしか検出されない形容詞もあるが、上位は共通している。形容詞としてはsurprisedとamazedが多く、wh語としてはhowが多く検出される。そのほかの形容詞はかなり頻度が下がることから、以下ではsurprisedとamazedを中心に調査を進める。これら2つの形容詞がどのような前置詞を介してwhat/howと共に起しているのか、その頻度を調べてみた。

表1 COCA, BNCにおける surprised とその類義語に隣接する what と how⁴

COCA			BNC		
	freq	permil		freq	permil
SURPRISED HOW	391	0.75	SURPRISED HOW	70	0.7
AMAZED HOW	120	0.23	AMAZED HOW	24	0.24
SURPRISED WHAT	59	0.11	SURPRISED WHAT	9	0.09
SHOCKED HOW	15	0.03	ASTONISHED HOW	7	0.07
AMAZED WHAT	12	0.02	AMAZED WHAT	5	0.05
ASTONISHED HOW	7	0.01	SHOCKED HOW	1	0.01
STUNNED HOW	4	0.01	FLABBERGASTED HOW	1	0.01
ASTOUNDED HOW	1	0.00			
TOTAL	609			117	

表2.1 COCAにおける surprised/amazed [i*] what/howの結果⁵

	freq	permil		freq	permil
SURPRISED AT HOW	622	1.2	AMAZED AT HOW	481	0.93
SURPRISED BY HOW	255	0.49	AMAZED AT WHAT	88	0.17
SURPRISED BY WHAT	150	0.29	AMAZED BY HOW	72	0.14
SURPRISED AT WHAT	137	0.26	AMAZED BY WHAT	44	0.08
SURPRISED ABOUT WHAT	8	0.02	AMAZED OF HOW	2	0.00
SURPRISED ABOUT HOW	8	0.02	AMAZED WITH WHAT	1	0.00
SURPRISED WITH WHAT	7	0.01	AMAZED ON HOW	1	0.00
SURPRISED WITH HOW	6	0.01	AMAZED OF WHAT	1	0.00
SURPRISED FROM WHAT	2	0.00	AMAZED IN HOW	1	0.00
SURPRISED FOR WHAT	2	0.00	AMAZED AFTER WHAT	1	0.00
SURPRISED OF HOW	2	0.00	AMAZED ABOUT WHAT	1	0.00
SURPRISED IN WHAT	1	0.00			
SURPRISED AS WHAT	1	0.00			
SURPRISED AS HOW	1	0.00			
SURPRISED AFTER WHAT	1	0.00			
TOTAL	1203		TOTAL	693	

表2.2 BNCにおける surprised/amazed [i*] what/howの結果

SURPRISED AT HOW	62	0.62	AMAZED AT HOW	37	0.37
SURPRISED AT WHAT	18	0.18	AMAZED AT WHAT	19	0.19
SURPRISED BY HOW	16	0.16	AMAZED BY WHAT	5	0.05
SURPRISED BY WHAT	14	0.14	AMAZED WITH WHAT	2	0.02
SURPRISED AFTER WHAT	1	0.01	AMAZED BY HOW	2	0.02
SURPRISED ABOUT HOW	1	0.01			
TOTAL	112			65	

アメリカ英語, イギリス英語とも surprised, amazed と共起する前置詞は at と by が典型的であることがわかる。また, at と how のつながりで生じている例が最も多いことも共通している。

前置詞の後ろに生起する wh 語について注意しなくてはならないことがある。ここまでの3つの調査は what という語だけで検索しており, 必ずしも感嘆節とはかわりがないものも含んでいる可能性があるということである。次の例では what 節の働きの違いが示されている。

- (6) a. I'm appalled at [what an unsuitable remark he made at the reception].
 b. I was appalled at [what he said at the reception].

(Trotta (2000: 119))

同じ *appalled at* (～に驚きおののく) の補部に生じているが, (6a) の *what* 節は感嘆節であるのに対し, (6b) のそれは自由関係節であり名詞句の働きをしている。自由関係節はここで調査対象とする *wh* 感嘆節の例とは区別しなければならない。したがって, 検索結果について, 自由関係節の *what* 節をすべて目視で排除することにした。その結果, *what* が感嘆節として生起することはまれであることが明らかになった。COCA では “surprised *what* 感嘆節” は 3 例, “surprised at *what* 感嘆節” は 2 例, “surprised by *what* 感嘆節” は 1 例しかなかった。また, “amazed *what* 感嘆節” は 1 例, “amazed at *what* 感嘆節” は 7 例, “amazed by *what* 感嘆節” は 1 例であった。

- (7) a. I was surprised what a strong speaker he seemed to be.
 b. Thompson says she's a little surprised at what good collaborators she and her son make.
 c. The public interest community has been pleasantly surprised by what a fierce defender of public broadcasting she has been over the years, and an innovator.
- (8) a. I ask the patient to rate his pains on a scale of one to ten, and you'd be amazed what a good indication that gives me of the success of the treatment.
 b. I was amazed at what a quiet person he seemed.
 c. I'm amazed by what a perfect way to watch TV this is.

(7, 8 はいずれも COCA からの例)

BNC では “surprised *what* 感嘆節” は 1 例, “surprised at *what* 感嘆節” は 1 例, “surprised by *what* 感嘆節” は該当なしであった。また, “amazed *what* 感嘆節” は 1 例, “amazed at *what* 感嘆節” は 1 例, “amazed by *what* 感嘆節” は該当なしであった。

- (9) a. You'll be surprised what nasty minds some of these coppers have.
 b. You will probably be surprised at what a different experience it is actually speaking the words rather than running through them in your head.
- (10) a. You'll be amazed what a difference a day or two will make.
 b. And that means targeting the stuff you send out, and I'm amazed at what terrible bad targeting a lot of people do.

(9, 10 はいずれも BNC からの例)

この結果からすると, 現代英語において, 驚きを表す形容詞 *surprised* と *amazed* が補部に *what* に導かれる感嘆節を取ることは典型的な表現とは言えないことになる。

How についても *wh* 感嘆節とみなされないものがある。(11) のように *the way* で置き換えられる解釈になるものは感嘆節とは解釈できないため排除した。

- (11) I was amazed at how he did everything. (COCA)

それらを排除しても *how* に導かれる節では多くが感嘆を表す節とみなすことができ, 典型的な表現として考えてよいと思われる。したがって, 以下では述語の形容詞として *surprised* と *amazed* を, 感嘆節として *how* に導かれるものを対象とすることにする。⁶

表3はCOCAとBNCにおいて *surprised/amazed* が *how* 感嘆節を補部にとるときに, どれくらいの割合で前置詞 *at/by* が明示されるかを示している。*How* 感嘆節に先行する前置詞には *at* と *by* 以外にもあるので, 割合はおおよそそのものであることに注意されたい。現代アメリカ英語と現代イギリス英語の両方で, *how* 感嘆節に先

表3 COCAとBNCにおける surprised/amazed (+前置詞) + how 感嘆節

	COCA	BNC		COCA	BNC
SURPRISED HOW	382 (29.3%)	70 (47.3%)	AMAZED HOW	111 (18.8%)	24 (38.1%)
SURPRISED AT HOW	598 (45.8%)	62 (41.9%)	AMAZED AT HOW	412 (69.7%)	37 (58.7%)
SURPRISED BY HOW	349 (26.7%)	16 (10.8%)	AMAZED BY HOW	68 (11.5%)	2 (3.2%)

行する前置詞は明示されることの方が多いということが出来る。COCAとBNCの検索結果を比較してみると、アメリカ英語の方がイギリス英語よりも、前置詞が明示される割合が高いということが出来る。

現代英語の2つの大規模コーパスの検索結果から、驚きを表す形容詞 (surprised と amazed) の補部位置ではhow感嘆節に先行する前置詞は明示される方が多いが、必ずなくてはならないということはなく、その随意性が確かめられた。この事実について、現代英語だけを見ていると、前置詞がある方が普通で、随意的に省略することが可能であるということもできよう。しかし、歴史的な変化を見てみると、前置詞を伴う方が新しい表現形式であることが明らかになってくる。

2. 2 歴史的な変化

Jespersen (1928) や Rohdenburg (2002, 2003) では、wh節が前置詞の目的語として生起することが増加してきているという歴史的な変化が述べられている。前置詞の随意性は、前置詞が義務的に用いられるようになる変化の途中段階とみなされている。しかし、wh節として取り上げられているのは疑問節であって、wh感嘆節については言及がない。本節では、前置詞の随意性を歴史的に説明するために、surprised/amazed が“前置詞(at/by+) + wh感嘆節”を補部にとることがどのように変化してきたのかをCOHA (the Corpus of Historical American English) をコーパスとして用いて調査する。⁷ 前節で明らかになったように、whatに導かれる感嘆節がまれであるので、how感嘆節に絞って歴史的な変化を明らかにする。

まず、COHAによって“surprised/amazed how”および“surprised/amazed at/by how”の検索結果を示す。表4.1はsurprisedの補部に生ずる“(at/by+) how感嘆節”の推移である。COHAにおけるそれぞれの初出の例を(12)に挙げる。

表4.1 COHAにおける“surprised (at/by) how”の推移

		1810s	1820s	1830	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
SURPRISED HOW	freq			1	2				1	2	4	1	3	13	14	21	16	23	22	30	24
	permil			0.07	0.12				0.05	0.1	0.18	0.04	0.12	0.53	0.58	0.86	0.67	0.97	0.87	1.07	0.81
SURPRISED AT HOW	freq									1	1	1	2	5	9	12	13	13	38	42	34
	permil									0.05	0.05	0.04	0.08	0.2	0.37	0.49	0.54	0.55	1.5	1.5	1.14
SURPRISED BY HOW	freq													1			2	1	5	13	27
	permil													0.04			0.08	0.04	0.2	0.47	0.91

- (12) a. You would be surprised how spry I am flying around the sewing-room, cutting corsage into heart-shape, and slitting a place for button holes, and making double-breasted jackets, and hollowing scallops, and putting the last touches on velvet arabesques and Worth overskirts. (COHA 1847)
- b. Afterwards, Peter was rather surprised at how much he had told. (COHA 1894)
- c. Edna was surprised by how little she seemed to miss Polly Peebles. (COHA 1935)

表4.1を見てすぐに気が付くことは、初めは前置詞なしにhow感嘆節が生じる時期があったということであり、それに遅れて前置詞atが、さらに遅れてbyを伴う例が出現してくることである。全体の頻度が急激に上昇する時期が2度見られる。1920年代から1940年代にかけて最初の上昇がある。次いで、1970年代から1980年代にかけて2度目の頻度の急上昇がみられる。Atだけでなくbyを伴うパターンも頻度も上昇し、前置詞を伴う方が前置詞なしよりも高頻度になるのはこの時期である。

表4.2はamazed (+前置詞) + how感嘆節の推移を示している。COHAにおけるそれぞれの初出の例を(13)に挙げる。

表4.2 COHAにおける“amazed (at/by) how”の推移

		1810s	1820s	1830s	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
AMAZED HOW	freq														6	2	2	1	5	7	4
	permil														0.25	0.08	0.08	0.04	0.2	0.25	0.14
AMAZED AT HOW	freq														3	5	5	6	23	24	28
	permil														0.12	0.2	0.21	0.24	0.91	0.86	0.94
AMAZED BY HOW	freq																	1		2	8
	permil																	0.04		0.07	0.27

(13) a. You'd be amazed how much trouble I could make you. (COHA 1940)

b. Commons was crowded, and Judith went there with Mark and was amazed at how many people she knew, how many friends she had made. (COHA 1940)

c. “Bullshit,” he said, and she seemed amazed by how serious she had become. (COHA 1976)

“Amazed how 感嘆節”と“amazed at how 感嘆節”は同時期にCOHAにおける初出の例がみられるが、その年代においては前置詞なしの方が倍の頻度で生じている。前置詞なしがもともとあったということは明らかにできないが、その頻度から、最初期には前置詞なしの方が普通であったということができよう。“Amazed at how 感嘆節”についても、1970年代から1980年代に頻度の急激な上昇がみられる。Byを伴う例が生じるようになるのはこの時期からである。

Surprisedについてもamazedについても、初めはhow感嘆節に前置詞が生じない例の方が高い頻度で検出されるが、やや遅れて前置詞を取る方が頻度の上で上回るようになってきた事実から考えると、どういう場合に前置詞が脱落するのかというのではなく、どういう場合に前置詞が生起するようになったのかという観点での説明をする必要がある。

Surprisedに比べると、amazedがhow感嘆節を補部にとることができるようになったのはずいぶんと後になってからのことである。しかし、いったんhow感嘆節を取るようになると、前置詞atを伴う例の頻度が短期間に上昇し、やや遅れて新たにbyを伴うようにもなっていく変化はsurprisedの場合と同じである。すべての語に同時期に同じ変化が生じたというよりも、まず、もっとも典型的なsurprisedに起きた変化が、漸次、ほかの語へと広がりを見せる変化であることが示されている。

2つの形容詞surprisedとamazedの両方について、1970年代から1980年代にかけて前置詞の出現頻度がat, byともに急激に上昇している。この時期に“(前置詞+) how感嘆節”の頻度が急上昇する何かしら理由が何かあると思われるが、ここではその事実を示すにとどめる。

3. 試案

本節では、驚きを表す形容詞surprisedとamazedの補部として生起するhow感嘆節に先行する前置詞について、なぜ現代英語で随意的な生起になっているのか、という問いに歴史的な変化の視点からの説明を試みる。

Wh名詞節に先行する前置詞の生起が随意的であるとき、どのような場合に脱落・省略されうるのかということが問題になることが多い。感嘆節だけを取り上げているわけではないが、古くは山川(1954: 54)に記述がある。

(14) a. He complained much of how he had been impeded by his skirts upon the march. (山川(1954: 54))

b. You've no idea what a job I had to run him to earth. (山川(1954: 55))

(14a)のように「節の前に前置詞を表現することは、正確な意味の関係を明示することができるのではあるけれども、往々たどたどしい語調をかもしがちとなるため、文脈上自明な前置詞は表現されないことがある」として、(14b)のような前置詞なしの例を挙げている。「文脈上自明な前置詞は表現されない」という点が重要である。前置詞がなくとも意味的に不明確さを生じさせないならば前置詞がなくともよい、という考え方は、八木(1999)にも共通している。

Wh節に先行する前置詞の随意性に関して、八木(1999: 231f.)は以下の感嘆文の例において、前置詞の省略ができないというインフォーマントの調査結果を示している。

- (15) a. She spoke of how nice it would be to keep house in our hometown.
 b. He smiled to himself at how terrified she had been.
 c. She was ashamed at how much she needed him.
 d. She shuddered at the thought of how close she was to destroying herself.
- (16) a. She spoke of what a beautiful scene it was.
 b. He smiled to himself at what a success it was.
 c. He was shamed at what a rude fellow he himself was.
 d. She shuddered at the thought of what a narrow escape she had.

(八木(1999: 231f.))

これに対して、(17)では驚きを表す surprised とそれに続く感嘆節が意味的に整合していることから前置詞が省略されうるとしている。

- (17) a. I was surprised (at) how little I had known about her.
 b. I was surprised (at) what a beautiful city Portland is.

(八木(1999: 231f.))

確かに現代英語においては前置詞が明示される方が頻度は高いのであるが、「省略されうる」としてしまうと、前置詞が明示されている方がデフォルトとの印象を与えてしまう。how感嘆節に先行する前置詞がない状況が先に存在していたという歴史的な変化の事実と合わなくなってしまう。そこで、「意味の整合性を示す必要が生じるようになってきたときに、前置詞が明示されるようになった」ととらえ直してみることにしよう。以下では、この試案によって説明される状況があったことを検証する。

表5をみると、驚きを表す感情の形容詞(surprisedとamazed)の補部には、how感嘆節が生じるようになる以前からthat節やto不定詞節が生起していたことは明白である。

表5 COHAにおける“surprised/amazed that/to”の推移

		1810s	1820s	1830	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
SURPRISED TO	freq	6	56	90	135	208	190	221	218	264	267	225	217	230	231	208	157	193	235	313	294
	permil	5.08	8.08	6.53	8.41	12.63	11.14	11.91	10.73	12.82	12.08	9.91	8.46	9.35	9.49	8.47	6.55	8.1	9.28	11.2	9.94
SURPRISED THAT	freq	2	38	44	45	59	57	52	79	68	71	71	91	79	79	99	74	97	121	129	144
	permil	1.69	5.49	3.19	2.8	3.58	3.34	2.8	3.89	3.3	3.21	3.13	3.55	3.21	3.24	4.03	3.09	4.07	4.78	4.62	4.87
AMAZED TO	freq	1	6	7	13	8	19	25	34	32	34	38	45	43	39	33	26	14	28	32	24
	permil	0.85	0.87	0.51	0.81	0.49	1.11	1.35	1.67	1.55	1.54	1.67	1.75	1.75	1.6	1.34	1.08	0.59	1.11	1.15	0.81
AMAZED THAT	freq		1	3	6	3	6	10	15	6	11	10	17	16	20	15	20	20	37	49	39
	permil		0.14	0.22	0.37	0.18	0.35	0.54	0.74	0.29	0.5	0.44	0.66	0.65	0.82	0.61	0.83	0.84	1.46	1.75	1.32

- (18) a. I was not surprised that all voices were still and all lights extinguished, for this was the hour of repose. (COHA 1827)
 b. When her aunt and Miss Agnew visited her, they were surprised to find her so cheerful. (COHA 1824)
 c. YWhen I had finished, I was amazed to find myself standing up; ... (COHA 1823)
 d. I am amazed that the wise people of your colony should hope to rear the vine in this cold and sterile land; a fit climate it is not for any delicate plant. (COHA 1827)

このthat節やto不定詞節は、主語が驚いた原因・理由を表している。感嘆節は「予想外、または、異常であることを述べる (Elliot(1974)参照)」ものであると言われる。That節では十分に示すことができない予想外の状

況が驚きの原因となっていることを示すために、that節に加えて感嘆節も surprised の補部に生じるようになったと仮定しよう。感嘆節が意味する「予想外」「異常さ」と述語形容詞の「驚き」の間には意味の整合性がみられるため、比較的容易な用法の広まりであったと考えられる。また、that節は前置詞を取ることがなかったため、前置詞の生起が要求されないまま wh 感嘆節は補部位置に生起するようになった。⁸

次に、前置詞の使用の変遷を見てみる。How 感嘆節が補部として生起できるようになる前から、補部に名詞句が生じているときには前置詞が必要とされていた。

表6 COHAにおける“surprised/amazed at/by”の推移

		1810s	1820s	1830	1840s	1850s	1860s	1870s	1880s	1890s	1900s	1910s	1920s	1930s	1940s	1950s	1960s	1970s	1980s	1990s	2000s
SURPRISED AT	freq	8	60	120	148	147	145	187	197	189	174	157	157	148	148	135	157	129	154	156	115
	permil	6.77	8.66	8.71	9.22	8.92	8.5	10.07	9.7	9.17	7.87	6.92	6.12	6.02	6.08	5.5	6.55	5.42	6.08	5.58	3.89
SURPRISED BY	freq	3	15	44	42	36	33	54	41	69	44	32	37	58	49	65	81	91	124	162	210
	permil	2.54	2.17	3.19	2.62	2.19	1.94	2.91	2.02	3.35	1.99	1.41	1.44	2.36	2.01	2.65	3.38	3.82	4.9	5.8	7.1
AMAZED AT	freq	2	35	14	33	37	36	38	49	57	60	58	86	57	65	66	50	69	62	81	88
	permil	1.69	5.05	1.02	2.06	2.25	2.11	2.05	2.41	2.77	2.72	2.56	3.35	2.32	2.67	2.69	2.09	2.9	2.45	2.9	2.98
AMAZED BY	freq		1		4	2	4	2	2	3	11	11	10	12	15	13	14	17	28	30	42
	permil		0.14		0.25	0.12	0.23	0.11	0.1	0.15	0.5	0.48	0.39	0.49	0.62	0.53	0.58	0.71	1.11	1.07	1.42

- (19) a. You are surprised at the suddenness of my resolution, you say. (COHA 1822)
 b. Not long after the storm, we were surprised by the sudden appearance of young Nick. (COHA 1823)
 c. I was amazed at the awful beauty of her countenance; her bonnet had fallen back, (COHA 1823)
 d. Passing into this apartment he was again amazed by the seeming distance of the enclosed space before him.
 (COHA 1845)

ここで大切なことは、前置詞の違いによって、些少かもしれないが、意味が異なるということである。

- (20) a. I was quite surprised by his attentiveness.
 b. I was quite surprised at his attentiveness.
 (Bolinger (1972: 51))

前置詞として at を用いれば、surprised は形容詞性が強く、前置詞の目的語となっている出来事に主語が遭遇して驚いたことを表す。前置詞に by を用いる時、surprised は動詞性が強く、前置詞の目的語となっている出来事が主語を驚かすことが含意される。これら2つの前置詞の選択とそれに対応する解釈のうち、that節が生じている場合は“at + 名詞句”の場合と同じ解釈になっている。That節が表す出来事・状況に遭遇し驚く、ということである。

How 感嘆節が補部として用いられる場合の解釈を考えてみよう。文全体としては、主語が予想しないような出来事、状況に遭遇して驚いたことを表現しようとしたと考えられる。つまり、that節と同じに驚きの原因を表す働きを how 感嘆節も表したと考えられる。つまり、名詞句であれば at が選択される意味で用いられたのである。もしも、surprised/amazed に共起する前置詞が at しかないということであれば、わざわざ前置詞を補わなくてもよかつたはずである。しかし、表6で明らかなように、how 感嘆節が用いられるようになった時期にはすでに at も by も用いられ、使い分けられていた。そこで、新しく用いられるようになった how 感嘆節がどちらの意味で用いられているのかを明示しようとする力が働いたと推察される。How 感嘆節が明らかに驚きの原因となるように解釈されるには、前置詞 at を明示的に表現する必要があった。このように考えると、前置詞なしに生起し始めた how 感嘆節に、ほどなく、(ほかの前置詞ではなく)前置詞 at が先行するようになった理由が説明される。ここで注意すべきは、どんな場合にでも how 感嘆節に前置詞 at が先行しなければならない、というようなことではなかったと考えられることである。文脈上、述語動詞との意味の整合性があり、驚きの原因であることが自明であれば、前置詞をとらない形式であってもよいことが残っている一つの理由になる。

いったんhow感嘆節に前置詞が先行する形式が許されるようになると、前置詞をbyに置き換えて、how感嘆節の内容が主語を驚かせるという意味にとれるように表現が広がりを見せるようになった。このことと関係していると思われる事実が表6に現れている。Surprisedについてatと共起する頻度とbyと共起する頻度が1970年代ごろから次第に差が縮まり始めて2000年代には逆転している。How感嘆節についてのみbyの使用頻度が高まったというのではなく、驚きを表す述語形容詞そのものについて、どの前置詞が生起するかを選択することによってより豊かな意味を示せるように変化が進んでいると考えられる。

4. おわりに

本小論では、驚きを表す形容詞としてsurprisedとamazedを取り上げ、その補部としてhow感嘆節が生起するときに、それに先行する前置詞の生起が随意的であるという事実について、歴史的な変化の視点から論じた。現代英語だけを見ていると、how感嘆節に先行する前置詞が省略されることがあるとみなされる現象が、COHAを用いた調査から、歴史的には、逆に、前置詞が生起するようになってきている事実を明らかにした。

はじめは前置詞なしで用いられたhow感嘆節が前置詞atを伴うようになってきた要因として、文全体として形容詞との意味の整合性を明らかにしようとする力が働いたためという仮説を立てた。How感嘆節が補部に生起し始めたころにはすでに、surprisedもamazedも名詞句が補部であれば、前置詞としてbyが生じるか、atが生じるかで異なる解釈を示せる状況にあった。How感嘆節が新しく生起できるようになった時に、それがどちらの意味で用いられているのかを前置詞によってはっきりと示そうとしたのではないかと考えた。はじめは驚きの原因であることを明示するためatが用いられた。その後、byとの共起も許されるようになってきた。このように考えると、もともとは前置詞がなく、初めにatが、やや遅れてbyが生起するように時期がずれていることが説明されると思われる。現代英語において、前置詞の生起が随意的であるのは、how感嘆節が驚きの原因としての解釈が文脈上明らかであるときに、前置詞を用いないももとの形式も使われ続けていることが一つの理由であるとした。

驚きを表す形容詞の補部において、wh感嘆節が生起するようになって200年ほどで、前置詞を伴うことの方が多くなってきている。今後、wh感嘆節には前置詞の生起はますます義務的になっていくのかもしれない。

本稿ではwh感嘆節について、生起する環境を「驚き」を表す形容詞の補部に限定したが、大規模コーパスを用いることにより、ほかの意味を表す形容詞の補部に生起する場合や、動詞や名詞という別の範疇の補部においても調査を進めて、より一般化できる説明になるようにしていかなければならない。

注

- 1 COCA (the Corpus of Contemporary American English) はBrigham Young大学のMark Davies氏がWeb上で公開しているコーパスである。2017年7月末現在で1990年から2015年の現代アメリカ英語およそ5億2千万語からなる。BNC (the British National Corpus) はLancaster大学がWeb上で公開しているCQP版を利用した。およそ1億語のイギリス英語からなる。
- 2 検索文字列にある [=surprised] はsurprisedの類語すべてを意味している。
- 3 間接感嘆節のwh節としてhow/what以外にも可能なwh句があることは知られているが、ここでは感嘆節として典型的なhowとwhatのみを取り上げた。
(i) It's amazing who they appointed/which ones they preferred/where they took him. (Huddleston and Pullum (2002: 992),
- 4 表中のfreqはコーパスから検出されるデータ数 (frequency) を、permilは100万語あたりの頻度 (per million) を表している。
- 5 検索文字列 [*] は1語からなる前置詞すべてを意味している。
- 6 驚きを表す形容詞surprised/amazedの補部位置でwhat感嘆節がなぜまれなのかという問題については稿を改めて考察する。
- 7 COHA (the Corpus of Historical American English) はBrigham Young大学のMark Davies氏がWeb上に公開している1810年代から2000年代のアメリカ英語を10年単位でまとめたコーパスで、約4億語の規模がある。
- 8 How感嘆節がどのような条件のもとでthat節と同じ驚きの原因となるような補部位置に生起できるようになったのかということは解明しなければならない問題として残っている。ここでは、歴史的な事実として、まず、前置詞なしにhow感嘆

節が生起するようになったという事実を重視しておくにとどめる。

参考文献

- 阿戸昌彦. 2015. 「後期近代英語から現代英語の「名詞 + 前置詞 + Wh節」」『英学論考』44. 1-22. 東京学芸大学英語合同教室.
- 阿戸昌彦. 2017. 「「形容詞 + 前置詞 + wh疑問節」における前置詞の出現」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系 I』第68集. 85-96.
- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Bolinger, Dwight. 1972. *That's That*. The Hague: Mouton.
- Collins, Peter. 2004. "Exclamative Clauses: a Corpus-based Account," *Proceedings of the 2004 Conference of the Australian Linguistic Society*, 1-12.
- Collins, Peter. 2005. "Exclamative Clauses in English," *Word* 56, 1-17.
- Elliott, Dale. 1974. "Toward a Grammar of Exclamations," *Foundations of Language* 11, 231-246.
- Grimshaw, Jane. 1979. "Complement Selection and the Lexicon," *Linguistic Inquiry* 10, 279-326.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 稲田俊明. 1989. 『補文の構造』東京：大修館書店
- Jespersen, Otto. 1928. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. Vol.III. London: Allen & Unwin.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Rohdenburg, Günter. 2002. "Processing Complexity and the Variable Use of Prepositions in English," *Perspectives on Prepositions*, ed. by Hubert, Cuyckens and Günter Radden, 79-100, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.
- Rohdenburg, Günter. 2003. "Cognitive Complexity and Horror Aequi as Factors Determining the Use of Interrogative Clause Linkers in English," *Determinants of Grammatical Variation in English*, ed. by Rohdenburg, Günter and Britta Mondorff 205-249. Berlin: Mouton de Gruyter.
- Rosenbaum, Peter S. 1967. *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Ross, John R. 1973. "Nouniness," *Three Dimensions in Linguistic Theory*, Osamu Fujimura, 137-257. Tokyo: TEC. [Reprinted in *Fuzzy Grammar: A Reader*, ed. by Aarts, Bas, Davidson Denison, Eveline Keizer and Gergana Popova. 2004, 351-422. Oxford: Oxford University Press.]
- Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage*, 3rd ed., Oxford: Oxford University Press.
- Trotta, Joe. 2000. *Wh-Clauses in English: Aspects of Theory and Description*. Amsterdam: Rodopi.
- 八木克正. 1999. 『英語の文法と語法一意味からのアプローチ』東京：研究社出版.
- 安井稔, 秋山怜, 中村捷. 1976. 『形容詞』(現代の英文法第7巻)東京：研究社出版
- 山川喜久男. 1954. 『句と節』(英文法シリーズ第22巻)東京：研究社出版

コーパス

BNC: The British National Corpus

COCA: The Corpus of Contemporary American English

COHA: The Corpus of Historical American English